

ALS患者の夢手助け

仙台市に住む筋萎縮(いしゅく)性側索硬化症(ALS)の女性患者の自立の願いを助けようと、宮城大の学生有志が介護支援のサークルを結成。一年余りにわたって夜間、女性宅で泊まりがけの活動を続けてい

る。重度訪問介護ヘルパーの資格を取るメンバーも増え、女性との「親子のようなきずな」を日々育てながら、将来への生きた学びを重ねる。

泉区南光台の千葉淑子さん(66)の家は毎夜、若者の声があふれる。ALSのため人工呼吸器を付けてベッドで過ごす千葉さん。昼は民間のヘルパーやボランティア、夜は学生サークルの

live
とうほく

仙台 宮城大生有志が自立支援サークル

訪問介護を受ける。その名も「スマイルきのこ隊」(三十五人、顧問・高橋和子宮城大看護学部准教授)。

四年前に発病。以前は次女美美さん(26)が同居、働きながら夜の介護をしていたが、千葉さんは「患者も家族も自立して暮らせた」と願い、東北でもまだ少ない「二十四時間他者介護」の実践を思い立った。

一昨年三月に、不自由な指でのパソコン操作で投稿を書き、本紙声の交差点を通して支援者を募った。その訴えが、宮城大で看護学を志す学生たちの胸にも届いた。

その秋、「自分たちにも何かできないか」と当時の三年生ら有志が千葉さんを訪ねて相談し、サークルが発足した。「責任ある有償の活動をしよう」と東京で研修を受け、重度訪問介護従事者の資格を取ったメンバーも十人おり、仲間を引っ張る。夜七時半から翌朝まで二人一組で、呼吸器の

「何かできないか」夜間、泊まりがけでサポート



ベッドの千葉さんと、文字盤を通して語り合うメンバー＝仙台市泉区「スマイルきのこ隊」

「24時間他者介護」を実現

点検や体位調整、家事や食事作りなどをする。「大学の実習を経験する前に、実際の患者の方と出会うには笑いが絶えない。会い、どう接したらいいのかわかりませんでした。でも、分らないことは千葉さんに聞けばいい」と、年の古館朋子さん(30)。

知り、何でも相談し、助言してもらって仲になりました。三代目代表で二年の高松由和(ゆわ)さん(30)はこう話す。声を出せない千葉さんを受け、資格取得にも挑んでいる。そこから、「在宅看護の道に関心を持つ先輩がほとんど」(高松さん)という。最近では宮城学院女子大にも仲間が広がった。ひたむきな若者の姿に千葉さんも「わたしの毎日の生活になくてはならない

『家族』です。どんどん成長して、将来が楽しみと文字盤を通して語った。若さと刺激をもらっていいのだ。

日本ALS協会宮城県支部も期待する。同じ患者の和川次男支部長(59)「仙台市泉区IIの妻はすみさん(55)は「地域に介護力がな」と、患者も家族も生きていけない。看護学が若い人が支えてくれるのはうれしく、当事者の声から始まる医療のために一番大事なこと。その輪が広がるよう、支部としても応援していきたい」と言う。(生活文化部・寺島英弥)